

http://ms.aai.ac

建築学生ワークショップ 東大寺 2020

architectural workshop Todaiji

参加学生募集！

応募締切

5.22
Call for entry

東大寺空撮画像(全て画像提供 東大寺)

学問の原初の聖地 ― 東大寺

「国内初のプリツカー賞授賞式の聖地に於いて」

平成元年 プリツカー賞（授賞者：フランク・ゲーリー）から約30年
東大寺 大仏殿 廻廊 開催

東大寺について

728年に創建された金鍾山寺を源とする東大寺は、総国分寺的な役割も果たしたことから「華嚴」をはじめ奈良時代には仏教六宗の宗所（研究所）が設けられていました。そして平安時代には、「天台」と「真言」の教学も盛んに研究され、「八宗兼学」の学問寺と呼ばれるようになりました。つまり現代の総合大学の役目となり、わが国で伝えられてきた「学問の原初の聖地」ともいわれています。

開催

本開催は、公募した参加学生を5月29日に選定し、8つの班に分かれて、6月20日（土）に全国から奈良に集まり、現地調査を開始します。東大寺では、開催テーマとしての位置づけにもあるこの場所が持つ特有の力や意味を身体で感じ、その中から各々の班で発想の原点を見出していきます。さらに周辺地域の街歩きを繰り返し、いま現代に生き、奈良で学んでいることへの意味をみずから問うていきます。

7月25日（土）の提案作品講評会では、国内外にて活躍をされる建築家の先生方を中心とした講評者の指導のもと、日本における貴重で特殊な環境における場所に根づいた実作品をつくりあげる意味を問い正され、7月26日（日）の実施制作の打合せでは、地元の建築士や施工者、大工や技師、職人の方々に伝統的な工法を伝えていただく機会を得ながら、日本を代表する組織設計事務所の方々や多くのゼネコンに所属される技術者の皆様による実技指導をいただきます。

8月30日（日）、この参加学生たちが制作した小さな建築が8体、東大寺大仏殿周辺区域に実現します。当日は、これらのプロセスを経て創出した建築空間を1日だけ、どなたでも体験していただけます。そして、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や美術家の方々、世界の建築構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評者にお集まりいただき、公開プレゼンテーションを開催いたします。

学び

歴史環境を現代にも残すこの場所で、全国から集まる学生らがこの伝統的な過程に触れ、この場に位置づけた建築の解釈を生む。普段、学内の似通った価値観の中で学んでいる建築を学ぶ大学生にとって、大変貴重な経験を日本学問の原点である「東大寺」に関わる人々と共に取り組む機会としたいのです。将来を担う学生たちが今という時代に向き合い、この場所でできることに全力で取り組む。境内には、金堂や二月堂をはじめとした伝統的な仏教儀礼の宝庫となる貴重な文化財を多く蔵し、世界各地から多くの参詣に訪れるこの地で共に学んだメッセージを発信していきます。学生たちはきっと、その若い感性によって新たな発見をし、日本のナショナルリティを未来へ継ぎ、創造する提案をしてくれることでしょう。



大仏様



法華堂



二月堂



南大門（鎌倉時代）



鐘楼（鎌倉時代）



転害門（奈良時代）



校倉（奈良時代）

Architectural Workshop TODAIJI 2020

開催場所 東大寺周辺区域（奈良県）

東大寺は、奈良時代には「六宗兼学」、平安時代を経て「八宗兼学」といわれた学問寺。わが国で伝えられてきた「学問の原初の聖地」です。



現地滞在スケジュール

6月13日(土) - 6月14日(日)
現地説明会・調査(1泊2日)

7月18日(土) - 7月19日(日)
提案作品講評会(1泊2日)

8月25日(火) - 8月31日(月)
合宿にて原寸制作(6泊7日)

8月30日(日)
公開プレゼンテーション

※参加申込の際に、全日程の予定を確認してからお申込みください。
7月4日(土)午後
各班エスキース(東京・大阪会場)

開催期間 2020年8月25日(火) - 8月31日(月) 6泊7日

※合宿にて原寸制作
※8月30日(日)現地にて公開プレゼンテーション

参加費用 実費 (宿泊費、保険代、図録・資料費、一部食費等 ¥35,000 事前徴収制)

※現地までの交通費は各自別途負担となります。
※開催地の有志の方々のご協力と、学生の参加費により運営をしています。

参加申込 ウェブサイトからお申込みください <http://ws.aaf.ac>

※参加者募集期間 2019年9月2日(月)~2020年5月22日(金)23:59(必着)
※参加対象者 建築および都市、環境、デザイン、芸術など、これに類する分野を学ぶ学生および院生
【参加学生】定員:60名程度(大学院生8名+参加部生42名+運営サポーター10名)
8グループを予定
ただし、定員を超えた場合は、主催者による選考をおこないます。予めご了承ください。
【運営サポーター】定員:5~10名程度(参加・宿泊費無料 開催期間中)
開催期間中、合宿期間中の運営サポーターも募集いたします。(学部は問いません)
※交通費・食費 各自別途負担

参加予定講師者

日本の文化を世界へ率いる方々を中心として、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や都市計画家、コミュニティデザイナー、構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評。また近畿二府四県の大学で教鞭を執られ、日本を代表されるプロフェッサー・アーキテクトの皆さまにご参加いただけます。

太田 伸之 (前クールジャパン機構 CEO)	腰原 幹雄 (構造家 東京大学 教授)	平田 晃久 (建築家 京都大学 教授)
小松 浩 (毎日新聞社 主筆)	櫻井 正幸 (旭ビルウォール 代表取締役社長)	平沼 孝啓 (建築家 平沼孝啓建築研究所 主宰)
建畠 哲 (美術評論家 多摩美術大学 学長)	佐藤 淳 (構造家 東京大学 准教授)	藤本 壮介 (建築家 藤本壮介建築設計事務所 主宰)
南條 史生 (美術評論家 森美術館 館長)	陶器 浩一 (構造家 滋賀県立大学 教授)	安井 昇 (建築家 桜設計集団 代表)
養 豊 (美術評論家 兵庫県立美術館 館長)	芦澤 竜一 (建築家 滋賀県立大学 教授)	安原 幹 (建築家 東京大学大学院 准教授)
五十嵐太郎 (建築史家・建築批評家 東北大学 教授)	遠藤 秀平 (建築家 神戸大学 教授)	山崎 亮 (コミュニティデザイナー 東北芸術工科大学 教授)
倉方 俊輔 (建築史家 大阪市立大学 准教授)	竹原 義二 (建築家 摂南大学 教授)	横山 俊祐 (建築家 大阪市立大学 教授)
柴田 昌三 (造園家 京都大学 教授)	長田 直之 (建築家 奈良女子大学 准教授)	吉村 靖孝 (建築家 早稲田大学 教授)

建築学生ワークショップとは

建築ワークショップは、建築や環境デザイン等の分野を専攻する大学生を対象にした、普段の大学生活では体験できないスケールで作品制作を行う地域滞在型のワークショップです。国内外にて活躍中の建築家を中心とした講師陣の指導のもと、開催地の歴史や地域環境を研究しながら、他大学生との交流の中でその場所における社会的な実作品をつくりあげる経験を目的としています。

“今、学問の、原初の聖地から”伝えたいことを、空間として表現してください。

奈良県奈良市にある東大寺は、奈良時代には「六宗兼学」、平安時代を経て「八宗兼学」といわれた学問寺。わが国で伝えられてきた「学問の原初の聖地」ともいうべき貴重な歴史環境を現代にも残しています。この清らかで伝統的な場であるとともに日本初のプリツカー賞授賞式開催の聖地において、授賞式から30年ぶりの2020年、「建築学生ワークショップ」を開催いたします。将来を担う学生たちが今という時代に向き合い、この場所でできることに全力で取り組む。建築を学ぶ学生たちが仏様をおまつりする既存空間に対し心を寄せ、新たに建築空間の力を備えて「実際に作る」という取り組みは、大変貴重な試みです。学生たちはきっと、その若い感性によって新たな発見をし、未来を創造する提案をしてくれるこ

【スケジュール】

5月7日(木) 参加説明会開催(東京大学) 五十嵐太郎
5月14日(木) 参加説明会開催(京都大学) 倉方俊輔
5月22日(金) 23:59 必着 参加者募集締切(参加者決定)
6月13日(土) 現地説明会・調査
7月4日(土) 各班エスキース(東京会場・大阪会場)
7月18日(土)~19日(日) 提案作品講評会と実施制作打合せ
18日(土) 提案作品講評会
19日(日) 実施制作打合せ
7月20日(月)~8月24日(月) 各班・提案作品の制作
8月25日(火)~8月31日(月) 合宿にて原寸制作ファイナル
25日(火) 現地集合・資材搬入・制作段取り
8月30日(日) 公開プレゼンテーション
31日(月) 撤去・清掃・解散



東大寺金堂大仏殿(本殿)



東大寺

【制作内容】

“唯一無二の歴史的風土を守るために、あなたの提案を実現化してください”

原寸模型を地域産材(自然素材 / 木材、和紙、土、石など)の材料で制作

Architectural Workshop TODAIJI 2020

開催記念 説明会
講演会

全国の建築学生が合宿にて制作を行う「建築学生ワークショップ」を、2020年は8/25(火) - 8/31(月)に東大寺周辺区域にて開催します。このワークショップの参加募集の説明会と開催を記念して、活躍中の建築家・建築史家が自身の学生時代の体験を通して、現在の作品や取り組みにどう影響しているのかをレクチャーしていただきます。ワークショップへの参加を予定していない方でも、どうぞお気軽にご参加ください。

東京会場

東京大学 (弥生キャンパス)
農学部 弥生講堂アネックス

東京メトロ南北線「東大前駅」徒歩3分
東京メトロ丸の内線・大江戸線「本郷三丁目駅」徒歩10分

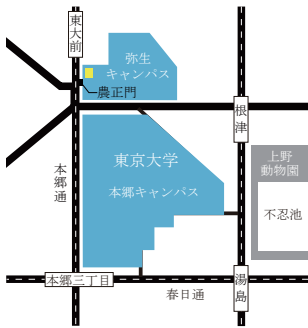
5月7日|木|18:30 - 20:00 (18:00 開場)

入場無料 | 定員: 先着 100名 | 要申込 ※当日のご参加も若干名様まで可能です。
※開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 五十嵐太郎 (建築史・批評家)

1967年生まれ。1992年、東京大学大学院修士課程修了。博士(工学)。現在、東北大学大学院教授。あいちトリエンナーレ2013芸術監督、第11回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館コミッション、「窓学展—窓から見える世界—」「インボッシブル・アーキテクチャー」の監修を務める。第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞、2018年日本建築学会教育賞(教育貢献)を受賞。『ル・コルビュジエがめざしたもの—近代建築の理論と展開—』(青土社)、『モダニズム崩壊後の建築—1968年以降の転回と思想—』(青土社)ほか著書多数。



京都会場

京都大学 (吉田キャンパス)
百周年時計台記念館 国際交流ホールIII

京阪本線「出町柳駅」徒歩10分
京都市営バス「京大正門前」または「百万遍」下車 徒歩10分

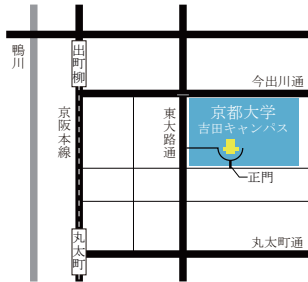
5月14日|木|18:30 - 20:00 (18:00 開場)

入場無料 | 定員: 先着 100名 | 要申込 ※当日のご参加も若干名様まで可能です。
※開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 倉方俊輔 (建築史家)

1971年東京生まれ。大阪市立大学准教授。早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学院博士課程修了。伊東忠太の研究で博士号を取得後、著書に『神戸・大阪・京都レトロ建築さんぽ』、『東京モダン建築さんぽ』、『吉阪隆正とル・コルビュジエ』、『伊東忠太建築資料集』ほか多数。日本最大級の建築公開イベント「イケフェス大阪」、品川区「オープンしなけん」、Sony Park Projectに立ち上げから関わる。日本建築学会賞(業績)、日本建築学会教育賞ほか受賞。



2010 奈良・平城宮跡 2011 滋賀・竹生島 2015 和歌山・高野山 2016 奈良・明日香村 2017 滋賀・比叡山 2018 三重・伊勢神宮 2019 島根・出雲大社

主催

AAF 知性あふれるレクリエーションを。 Art & Architect Festa
NPO/AAF Art&Architect Festa 特定非営利活動法人アートアンドアーキテクトフェスタ ウェブ www.aaf.ac Eメール info@aaf.ac

東大寺

奈良県

奈良市

旭ビルウォール株式会社 AGB

特別協賛

座 談 会 | “今、学問の、原初の、聖地から” 建築学生ワークショップ東大寺 2020

橋村公英(華嚴宗宗務長 | 東大寺執事長)

× 腰原幹雄(構造家 | 東京大学生産技術研究所 教授) × 櫻井正幸(エンジニア | 旭ビルウォール 代表取締役社長)

× 佐藤淳(構造家 | 東京大学 准教授) × 平沼孝啓(建築家 | 平沼孝啓建築研究所 主宰)



座談会の様子（東大寺にて）

——— この建築学生ワークショップは、日本の貴重な聖地を巡りながら開催してきました。歴史の特性を現代にもはっきりと残す開催地でその周辺的生活文化を合わせた調査を始め、観光として訪れるだけでは知りえない街や地域との関わりを学び、建築を永年保全していく造り方、守り方の技にも触れ、現地宿泊による制作を含めた体験から、神聖な場所の静粛な自然空間のコンテクストを見出し、現場で建築の解き方を探るきっかけを経験していきます。今回の開催地は、728年に建てられた金鍾山寺を源とした東大寺です。大和国の国分寺に充てられ、総国分寺的な役割を果たしたことから「華嚴」をはじめ奈良時代に六宗の宗所(研究所)が設けられ、平安時代には「天台」と「真言」の教学も盛んに研究されるようになった「八宗兼学」の学問寺となりました。つまり現代の総合大学の役目となり、わが国で伝えられてきた「学問の原初の聖地」である清らかな場に身を置き、この歴史環境を現代にも残す貴重なこの地で、全国から集まる建築学生が伝統的な構法に触れ、この場に位置づけられた建築の、現代の解釈を生み出します。このワークショップでは場所の特性を模索するため、大きく分けて「歴史」「場所性(地形)」「これから」の観点を提案に求めます。そのため開催の目標となるお言葉や意義について、この座談会でお伺いしたいと考えております。古代より現代に受け継がれてきた東大寺で、空間性へのテーマや実現へのコンセプトのヒントとなる話題を、どうか合わせてお聞かせください。

本日は開催地として多大なご尽力をくださいます東大寺にて、全国の参加学生に向けお導きくださる橋村執事長、そしてこの建築ワークショップを初年度から見守り続けてくださる東京大学の腰原先生、佐藤先生、そして毎年、私たちと併走してサポートをくださいます旭ビルウォールの櫻井社長と、オーガナイザーの役割を担い続けてくださいます建築家の平沼先生と共に、2020年東大寺開催に向けてお伺いしていきます。

平沼：この国で初めて「華嚴経(けごんぎょう)」の講説が実施されたのが、「金鍾山寺(きんしょうさんじ)」の建立後の740年。そして天平時代は華やかな時代であるとともに政変、干ばつ、飢饉、凶作、大地震、そして天然痘の流行で惨憺たる時代だったとも伝えられています。当時の聖武天皇はどのようにして、この場所に大仏建立という壮大な国家事業にふみきったのでしょうか。また、この地が神聖な場所となり、現代にも継いでこられた思想の背景を教えてください。

橋村：天平時代は、ユーラシア大陸において多彩な文化が交流し、とりわけインドに起こった仏教が我国に伝わって定着した時代です。つまりシルクロードがとても盛んだった時代ですね。一方、国内では政変や自然災害が起こり、さらには様々な文化と一緒に天然痘が持ち込まれた時代でした。天然痘の蔓延は朝廷の中枢にまで及び、藤原氏のトップたちが軒並み亡くなったこともあり、疫病というのが現代では想像できないほど恐れられた時代であったと思います。そのため、この事態をどのように治めるかが非常に大きな問題でした。

平沼：当時の町や暮らしの状況から、この地の生活文化と共に、守護的な役割として東大寺はつくられたのでしょうか。

橋村：東大寺が造られたのは町の中ではなく、平城京から少し離れた山に連なる丘陵地で、修行者が行き来するような場所でした。

佐藤：現在の航空写真を見るとこの辺りは発展した町なのですが、つくられた当時この辺り一帯は森だったということですか。

橋村：大仏殿のある場所を調べると、東側の山の斜面を崩して平坦に整地し、それを基礎にして大仏殿を建てています。また、平城京から見るとこの辺りは鬱蒼とした山の中だったようです。先立つ時代に、現在の法華堂から山に至る辺りを平城京から見てい

ると何か光が見えるというような話が広がり、そこで金鷲行者という者が修行していた、というような物語が伝えられています。ですから平城京から見ると、鬱蒼した森林の中で、神秘的で靈性に満ちた場所だったのだと思います。

佐藤：なるほど。東大寺がこの地に建てられた理由を教えてください。

橋村：聖武天皇が大仏様を造って大仏殿を建てるという詔を出されますが、当初の造営予定地は紫香樂だったのです。

佐藤：滋賀県の信楽ですか。

橋村：はい、そうです。最初は紫香樂(今の「信楽」)で造営が始まりました。ところが造営の途中に、山火事や大きな地震がおこるなどして、紫香樂では工事が進められないということになりました。そして改めて、この奈良に大仏様を造る場所を求めました。ここは平城京の東北に位置していて、しかも大仏様と大仏殿を建てるだけの基礎となる地面を拓ける場所だったのだと思います。

佐藤：当時からそういった知識があったのかわかりませんが、山を削って平地をつくれそうな場所という地質の特性も、候補地となった理由だったのでしょうか。

橋村：それも理由の一つだと思います。また前身寺院とされる金鍾寺や、名前があったかどうか分からない沢山の修行場がこの山林には存在したと伝えられています。つまりこの辺りが、仏教由縁の場所であるという認識も深かったと思います。

腰原：この場所に大仏殿がつくられた理由が深くわかりました。配置についても教えてください。まず仏様は、なぜ南を向かれていますのでしょうか。

橋村：仏様を安置するお堂は、明るい南面に開いて建てるという、古代寺院の基本的な建て方に習ったのだと思います。

腰原：顔が見える窓をつくるためといった意味で南に面しているのですか。

橋村：窓をつけるためにそういう建て方をしたというわけではありませんが、確かに大仏殿に観相窓という窓があります。相はお顔のことです。お顔を見ることができる窓が付いていますが、昼間に開けても見えないですね。



櫻井正幸
(旭ビルウォール代表取締役社長)



平沼孝啓
(平沼孝啓建築研究所主宰)

腰原：外が明るいからですね。

橋村：はい。夜、万灯供養会をするなどのために中に明かりを灯して開けると大仏殿の中門から綺麗に大仏様のお顔が見えるという造り方をしています。

腰原：それは仏様が外を見るためなのか、仏様のお顔を外より拝むための窓なのか、本来どちらが目的ですか。

橋村：大仏様をお堂の外から見るために観相窓は造られたと思います。

腰原：お堂に持つ僕らのイメージは、寒くて暗いというイメージです。自然の気候や風土に近い、寒さや暗さには何かの意味がありますか。それとも昔はお堂に人が入って拝むことがなかったのも、お堂は仏様の建物という意識で人間が快適である必要はなかったのでしょうか。そう考えると最低限、護摩などを焚く時の明るさがあれば良いのですか？

橋村：奈良時代に大仏様が造られたとき、4月9日に開眼法要が行われましたが、元々4月8日の予定でした。9日になったのは聖武天皇の体調やお天気のこともあったのかもしれませんが。4月8日というのは日本ではお釈迦様が生まれられたと考えられている日なのです。お釈迦様がおられた時代というのは大仏様が造られた時代からさらに1200年余り前です。華嚴宗では大仏様は「釈迦即毘盧遮那」と言い、お釈迦様はそのままだに毘盧遮那仏(大仏様)だという意味で、「毘盧遮那(びるしゃな)」という名前には光り輝く人という意味があります。お釈迦様そのものであるという大仏様を造り、その開眼の時、誕生仏をお祀りし、まるで命のある仏様として生まれてこられたように開眼されたのでしょうか。大仏様を、仏像なのだけでもお釈迦様から命の繋がるものとして開眼するという切な願いがそこに見て取れると思います。そういう願いの中で造られた仏様が、その建物の明るさや暗さや空間の力によって機能するような建物、というのが大仏殿のコンセプトだったのではないかと思います。

佐藤：この原寸制作を目的にした現地滞在型のワークショップでは、地産地消の自然素材を活かした構法やその地の伝統構法にも影響されながら、場所性に意味づくような新たな形を生み出すことを目標にしています。また扱いが難しい材料の性質を把握し、工夫を凝らした作品が今回も提案されると、参加した学生が自在に素材を扱う感覚を養えます。開催は約3ヵ月間に及びますが、実質5日間という短い施工組み立て期間で建てます。そういう感覚を養えるような提案として、今のお話から結びつくといいなと思います。

櫻井：今回の聖地には、鹿がいるのも特徴ですね。

橋村：私たちは植物性のものを食べてしまう動物と共存しています。

佐藤：和紙は食べるのですか？

橋村：食べます。一万円札は大好きです。

一同：（笑）

佐藤：他に何か、鹿と関連する素材がありますか。

橋村：例えば木の皮や麻の紐なども食べます。

櫻井：これまでの開催を振り返ると、このワークショップで入賞した学生が特別優れた思いを持つのではなく、そこで悔しい思いをしないと、失敗したことで気づいた経験の方が、結果として貴重な体験をしていると学生も感じているようです。私も経験上、失敗をして気付けた人の方が強いような気がします。この開催地には、鹿がいるというのも一つの大きな要素ですね。高野山の開催では、ファイナル当日の早朝に大雨が降りまして、無残にも壊れる作品がありました。こういった修業の場は色々な事を教えてくれるものだと私はその時、正に学びました。東大寺開催でも、挑む学生に多くを学んでほしいと思います。

橋村：この近くに料理店を開かれた女性がおられます。元は庭師の方でして、数年前に大変美しい日本庭園を造られたのですが、鹿に食べられてしまいました。でも今年伺ったら、綺麗に花が咲いていました。現場環境と、失敗の経験の中で得るノウハウもあるのかもしれない。

佐藤：それを今回、どこかのチームが学んで、上手くコントロールすると素晴らしいですね。わざと置いて、食べられない部分と食べられる部分で空間が生まれていくような。

櫻井：それは面白いかもしれないですね。

平沼：平城京当時は、町と東大寺はどのような関係でしたか。特に二月堂は、地域の生活文化に上手く影響を与えていたように感じています。

橋村：そうですね。二月堂と大仏様は少し違いますね。二月堂は観音様の信仰が盛んで、奈良や周辺の地域と信仰を通して繋がっていた印象があります。「二月堂のお水取りが終わらないと春が来ない」といわれるように、個々の人々の暮らしや祈りと深くつながってきたと思います。

腰原：二月堂は、町や庶民の暮らしと関わりがあったとお聞きしましたが、逆に大仏殿は圧倒的に大きいものです。このワーク



佐藤淳
（東京大学准教授）



腰原幹雄
（東京大学生産技術研究所教授）



二月堂参拝の様子

ショップでは、大きくても3 畝×3 畝×高さ3 畝ほどの建築を実現させます。大仏を含めて、圧倒的に大きいものの存在と、小さいものの存在というのは、概念という教えの中ではどのように位置づけられればよいでしょうか。

橋村：確かに大仏殿は圧倒的に大きいですね。答えになるのかどうか分かりませんが、「華嚴経」に関わる教えの中に、「一即一切」という言葉があります。また「華嚴経」の中にも「一微塵中に、世界あり」というような言葉が沢山出てきます。例えば、皮膚には毛がありますね。その小さな毛穴の中にさえ、無盡の世界・宇宙があるというようなことも説かれます。仏教では色々な物や事の間を「縁起」といいます。例えば何か良いことをしました、あるいは悪いことをしました、それは様々な条件があるので予知はできないが未来に必ず何か結果を生みます。これは時間の縁起ですよ。けれども華嚴経に関わる教えでは、例えば、中心と円周、建物なら一本の釘と家全体といった関係をも含め、物や事、理（ことわり）の世界に縁起という考えを広めてゆきます。非常に小さなものの中にも、極端に言えば宇宙全てが入っているということもいえます。逆に言うと、非常に大きなものであっても、それは時間や空間の両方の中で無限にある小さなものとの関わりの上、姿を現しているということになります。片方の大きなものだけ、ある片方の小さなものだけを見ようとするのではなく、それぞれの中に縁起で繋がっている関係性を忘れないで両方を見ていこうという考え方が華嚴経にはあります。

櫻井：では小屋でも大仏殿と戦えるかもしれないということですね（笑）。

平沼：お堂は増え続けているのですか？

橋村：東大寺は創建以後、罹災と復興を繰り返してきましたが、盛んな時代と比べれば何十分の一に、随分減っています。

平沼：減った理由は何でしょうか。

橋村：最近では、幕末維新の時にものすごく減りました。寺院を維持していくことができない社会環境になってしまい、たくさんのお寺が取り壊されてしまいました。正倉院周辺の芝生の場所も全部お寺でした。二月堂の裏参道の辺りや、山の中へ入って行く界限も昔は全てお寺でした。

佐藤：町並みの様にお堂が並んでいた、まさに町そうですね。

櫻井：お話しをお聞きして御縁を感じるのですが、ワークショップ開催の来年、日本はオリンピックイヤーです。東大寺が天平時代に国際化が進んで、様々なものが融合して出来たという話を聞くと、来年のオリンピックイヤーにワークショップの開催をさせてもらえることの意味が、とても直接的に繋がる印象を持ちます。先ほど境内をご案内いただく時にも思ったのですが、外国人の方が相当多いですね。

橋村：大仏殿の前に大きな灯籠がありましたが、これ一つを見てもここには、多くの地域の造詣デザインが絡まり合っています。ペルシャやインド、ライオンや唐草模様までこの中に表現されています。奈良時代はそういった交流が非常に盛んな時代だったのだでしょうね。

佐藤：その模様からも国際性を感じ、特徴を抽出するといったことを、このワークショップでも活かしてほしいです。

橋村：ミュージアムには奈良時代の展示品も多くありますが、シルクロードに想いを馳せるようなデザインも見つけることが出来ます。

平沼：最後にお聞かせください。建築家のフランク・ゲーリーさんが1989年、建築界のノーベル賞と称されるプリツカー賞の授賞式の際、平成元年に日本では初めてここ東大寺で開催されました。およそ30年の歳月を経て、令和となった年に、授与式が開催された大仏殿・東廻廊で、この開催の公開プレゼンテーションを予定させていただいています。学生らへ再現させてあげるのは叶いますでしょうか。

橋村：はい。台風などが無ければ、是非その場所で開催していただければと思っています。

平沼：ありがとうございます。東大寺で天台と真言や、教学が盛んに研究されはじめ、今の総合大学となったとお聞きしています。僕らが学んできた学問の世界は、東大寺が発祥だと認識してもよいものでしょうか。

橋村：現在では、宗派はそれぞれ別々のものですよ。かつては、特に東大寺では、奈良時代には六宗、平安時代を経て八宗というように、色々な宗を一つの寺の中で自由に勉強できたのです。

佐藤：それは全国的に見て東大寺モデルが特徴的だったのでしょうか。

橋村：そういった教育施設を総合的に奈良時代、鎌倉時代に持つ



大仏殿廻廊にて

ていたのが東大寺だということですね。

佐藤：そうすると総合大学のはしりということですね。

橋村：そうですね。古代の日本は、お釈迦様がおられた時代から1200年間に様々な形で説かれた仏教が全部一斉に入ってきた時代です。それらが整理されてきたのが奈良時代で、その様々な仏教の分野や付随する学問を総合的に学ぶことが出来たのが東大寺でした。

平沼：最後に橋村執事長から、東大寺にきて取り組む学生に向けて、メッセージをいただけないでしょうか。

橋村：大仏様も、生身のお釈迦様に模して称えるべき仏様としてお祀りされてきました。お堂というのはそのような佛像が、限りなく称える存在として安置されて機能する空間なのだと思います。そういう対象と繋がって行く空間が、現代の発想の中ではどのようなものかを見てみたい。

一同：最高に、難しいですね（笑）。

橋村：例えば仏像でも「慶派の仏像だ」、「阿弥陀さんだ」というように見ますよね。しかし皆さんも何かの拍子に、人の思考から見に行くのではなくて、「概念」なんてない時間に、何か「ある姿」が向こう側から立ち現われてくるという経験を持たれたことがありませんか。私は、仏師や建築家の作品を見ていて、この人もこれを見たのだな、という「ある姿」を感じることがあります。そういったこともこれから建築を目指される方にとって非常に大切だと思いますし、ワークショップで体験したいと思っていることの一つですね。

平沼：建築家のように見てくださっている。

一同：あはは。（笑）

櫻井：素晴らしいことです。

橋村：このような場所での制作から生まれる発想に出会えればうれしいと思っています。

平沼：本日は貴重なお話をありがとうございました。

一同：ありがとうございました！

（平成31年4月23日 東大寺にて）

——— 大変貴重なお話しをお聞かせいただき本日はどうもありがとうございました。このワークショップが参加学生にとって、とても貴重で意義深いものになると思います。そして将来、この場所で開催した意義につながるような提案作品を募りたいと思います。

聞き手：原之園健作（AAF | 建築学生ワークショップ運営責任者）